



三省錄

四

□ 9
4077
4

1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5 6 7 8 9 6

門口9
號4077
卷4



三省錄附言上

軒の志乃ふ

志賀忍

軒
昭和五年
五月丁亥
印

○黙々と勤解由次官孝子へ至如水軒某長九年三月廿四日卒入六十

九才半身中体の據えて終り予恩甲斐ち長政ハ

神君小あひぐは闇が原小野山城中人數不足を嘆ひて之に先

拘んとくを嘆き墨し法活人を考すを嘆くをあるま

時りを移すと勞の河す見原市吉井松原一葉本水の下知

かあらうひと金を給を以唇間小棲み地集ある活人ふつりち

抜く彼數百人の中小二重、食事を薄衣うそのうすを以て

こもを足し、がめを旨と告げか水曰今瘦弱かの生をすく
捨を寒んじたるふきのが何ぞな振のうに振ぬでさんや



事ある小彼活人出陣の用意とのほり称ひあらず。給仕をも
あらず極てお負ふ事あらず。かくして本集費を
もあた金船を行へまつも武用小傷んずるなき。二重、金船
を浮うむ。うらものあぐち費用なるす。まことに廣く板樹
を生んじて、人間多き。うらにむかし板、学悟とがく。やくはをきを
くも皆との始小感体ぢや。孝高傳記

○石川深山搜查する。山中のぐうの次才を放り。また洋山大名
道中。身小素面行脚とゆき。身を厚くいふ。山船
船を取り。度とど是の深山寂をばら。船は弱く。舟を取
あめとて。舟を取る。舟を取る。舟を取る。舟を取る。舟を取
はせし。舟人の舟を二十船。舟を取る。舟を取る。舟を取る。

不段り。不自由。不自由。不自由。不自由。不自由。
がね。がね。がね。がね。がね。がね。がね。がね。がね。がね。
小舟。小舟。小舟。小舟。小舟。小舟。小舟。小舟。小舟。小舟。
大舟。大舟。大舟。大舟。大舟。大舟。大舟。大舟。大舟。大舟。
浦。浦。浦。浦。浦。浦。浦。浦。浦。浦。

○昭和九年大火の了した。中止。火事の跡ある。火事の跡ある。

一 無百丈。外

大火事の跡相場。りょうば

一 古事三百文拾文

一 あさり面の四枚

一 ち／＼う圓一枚

一 ひづはひ二タロ古ア七百五拾文

一 松板あゝ即捨一枚

一 ひづ一異三拾枚

一 ひづ中百セ拾枚小八拾枚

一 もつじかみ拾文二拾文

一 やう洋シ即捨八文

一小すき新キ背文

一小けんじんニ面文

○も／＼ハ小きのきのりある軍需本多子取扱する事やあり是れ

今く法物のうつりやせびるにのうとす備前をのづくわす
あやむり當時法色の重慶中々きくぬる勿論しばら
水薦の様山民より安み辰年四月十六日ノ同吉二日止て
天保元寅年モ
西十九年、號 水府の

行美利者すう東嶽山中吉洋達が江戸ト水戸トアリ
トガ時少の賄料清えお世間ちよ井の用をあくまくうきのをうそ
たううち重慶の下連ねるうねがうく手しのねがうあら
こと武家軍用のい掛めあくまく支こまくがう

一 酒み味 き味代ふ拾文

一 豆腐 七拾六挺 き挺代ふ拾文

一 あんゆゑ 七拾挺 き挺代ふ拾文

一 あが
二 捨把 代ハヌセドミ
一 鼓 百四拾文 代ミヌセドミ
一 あんぬ 六把 三拾半 代ミヌセドミ
一 莫呂領 三拾半 三拾半 代九ヌセドミ
一 磨 里いき 八升 三拾把 代四ヌセドミ
一 里いき 八升 三拾把 代四ヌセドミ
一 里いき 八升 三拾把 代七ヌセツ
一 里いき 八升 三拾把 代四拾八ヌセツ
一 うめ 三拾把 代四拾八ヌセツ
一 うめ 三拾把 代三拾八ヌセツ
一 あい海苔 拾把 三拾把 代七ヌセツ
一 岩 三符 三符 三符 代八拾文
一 枝杞 一枝杞 一枝杞 一枝杞 代八拾文
一 うめ 一枝杞 一枝杞 一枝杞 代四拾八ヌセツ
一 松蕊 一枝杞 一枝杞 一枝杞 代四拾八ヌセツ
一 生姜 一枝杞 一枝杞 一枝杞 代四拾八ヌセツ
一 けい 一枝杞 一枝杞 一枝杞 代四拾八ヌセツ
一 きのく 一枝杞 一枝杞 一枝杞 代四拾八ヌセツ
一 莫呂領 四升 一枝杞 一枝杞 一枝杞 代四拾八ヌセツ
一 ぬはし 一枝杞 一枝杞 一枝杞 代四拾八ヌセツ

一 大豆粉

代百四拾八文五

一 玉筋粉

三挺 三挺 代拾六文々

一 芝麻

二抹 二抹 代九文六

一 花生

拾挺 拾挺 代九文六

一 火巴

吉膳 吉膳

一 酒のす

吉抹 吉抹

一 粉

却拾 却拾

一 玉米

二布 二布

一 豆蔻

又布 又布

一 うどん

三度三度

一 住人

却抹多合 代百三文却抹多合

一 庵丁人

日雇錢 一日一付 代三拾部又

但一十五日一付十七日止一日三人

十日付廿二日止日三付入

一人食

日雇錢 一日一付 代却拾四文又

葱メ

金豆粉

穀米一百三文

以金豆粉ニシカト穀米百文拾吉文

但一穀米豆粉九百四拾八文ノ直候

右志

附上五

仲義附四ヶ所清酒無形之萬能

ある方々の持て物を引かれらるる小舟を也

けんきん 加 酒醉鶴清酒連附

船泊橋門前萬角

小竹舟萬角

新諸向左伴二付

古酒幸伴二付

一大坂高	代ノ拾文	一大坂上酒	代ノ拾文
一西ふ酒	同六拾文	一西ふ上酒	同七拾文
一雪え梅上酒	同六拾文	一雪え梅上酒	同八拾文
一伊丹上酒	同七拾文	一伊丹西ふ上酒	同九拾文
一伊丹梅上酒	同八拾文	一池田梅上酒	同百文
一山治本梅上酒	同九拾文	一大坂上酒	同百拾文
一梅上味淋酒	同百文	一大坂之酒	同百拾文
一	一	一	一

一煌

附

有り

醉鶴清酒連附		同	
一大坂の内金	代百八文	一大坂	代百拾四文
一鶴地糸	同七拾八文	一結棒	同四拾文
一通江金糸	同七拾文	一尾張糸	同四拾八文
一てうし	同六拾文	一少風糸	同四拾八文

例題之無外新諸向左伴二付一煌

酒附四ヶ所清酒無形之萬能

酒附四ヶ所清酒無形之萬能

酒附四ヶ所清酒無形之萬能

酒附四ヶ所清酒無形之萬能

曰ひては、實木の支がわされば、かのづの武備のあらを
れども小人小無事とし後代から華表とのくにめり、夜食に住す
善矣。では、此を以て、其をうなづけを因ての費用多く、武の
儲ふかるをこのなり。著い法乞ひもやむむが、小食猿かと者
とくともとくせん。軍用の支えより金錢を惜しきに、後世もよろこ

中へたからびたまへあらず天和二年五月二十
日水府の屬和田平助といふ田舎流居合の者人子細あり
近去りけらむの御取締の寫とててゐるか彼のま

一具足 步多良皮多良
素綱木 七領 一同羽織

ふくらはし
かわらけ

まよのあくわむせうひおと食三足うりしよくもあくわ
牠三拾キ懷四キ三筋ハ全金拾キあ小粒穀九百三拾ノヒ
かか道を教知せば行ひやも今時三百石位の武士ハ三
足も胸よりはらぬはりとふ者の事じもをなすひや
き

○あら年もひあする活活人の才とあそびとを參るもあらぐの
三足も繫ぎや程も參もてひくやが知り又百石以上をうでと
中身しやえず腹も三足もつづいたやねとある三百石ねと
あうでいと云ひあ半の口上に相あむ活活も和様もとゆと
あうい面でとも知れぬとある名をきみをうけたる者あら
侍は食もばくとすもうち揚技舞ひ飴もも摺ひつまぬ船どくやも

トガの時代の世情、侍うるゝの、及ぶ歎き武士の、のうざを
あうじ学ふやくあうむとすよ候令鼻を曲くとも思ひてがき
ばうじうりくかくお意地合、底無くもとひ是れ、及ぶぬ仕合と
初の武士為ひほ佑め体。 武道初心抄

○忠曰「うるゝ人や、うるゝ事も先祖の大坂の傳の口傳さへうのちうが
手時々神法の用を記す」 様面ありまゆ小糠を手代
みえとありうりうき、激うらへん連寡じがあり
うことうううかく胸ふすやい」とおもひこと語り合ふ
あうのばうど遠御淡松の木床板浦助た馬うふ善事也十九
年寄多大役出陳うるの、お觸虫のり、とのうち、お床板浦
賀を候と人を優徳海三丈と定六丈但し、床板月うる新と

○東鑑の治承四年の日記を實録した中少
わくまぐみ
小見
よりや

一歲去歲代而歲

一
穎士集名拾遺

。はた中將保科山

一 岳を越代而後
一 霧を越代而後
一 置を赤み拾續
一 精を赤み拾續
○ 守はた中將保科正之君に乞ひ書の傳
竹と朱に印すと又生る
一 貫てせむるか齋少翁が承うけ
一 余が今見ゆるに遇まつわり上あがりや云々後度ごどに今何を
爲なめりかと考かげば名なめしがうりや
のほりしと云いふ

○窩葛カク 情念シヨウニヤン 右大原ムヒラ

のうきうざいを
たまに小僧おとこたりと暮合くわいあり

卷之二

志の小説の娘

書の落葉の下

七言韻書

のよき京師より

小深さんといふ者

民也者

あさくや 宮室朝の妻と天地總満十 市井雜談

○某年某海屋にて萬食の故で近より犯せらる初ニ奥向の内
を定め、先輩より始人、余の女中をたゞ九人、うちその内
色審の老母松尾がすみ入唐のうなは、萬食のうの、近所有
にて、家老が詫問するやうのばあを難済、ある女中で減
ふやかして、尾かすは被うの、滅じて、うは、有る事無矣
不やほくもお年中お處所やよど見景、某海屋を嘗て、女中
住ちて、お居る、市ヶ谷へ出でて、お身上を身ふれま
す。お讀きぐるまに、おは度、能手才、うのち、教え、肩幅をや
渡しに、薄る裏面、女をせまく、脇をきり、右ひ左より、左ひ
女を渡し、やよ度、腰に軽く、尾かすもお極みを以

出立漏らぬ、かく某海屋、女中、あらび日引名うねるとの
苦局、お勤め、女中を人の物を手で持當時十六才、おま
やねが生れ達る、要松方西側、名前おひま仕屋事、安古
く女も、脇や腰、お老女時程、达形かく、ばくの、おまられ
らうと、女も、筋、腰、お老女時程、达形かく、ばくの、おまられ
左後の力も、筋、腰、お老女時程、达形かく、ばくの、おまられ
らうと、筋、腰、お老女時程、达形かく、ばくの、おまられ
左の筋、筋、腰、お老女時程、达形かく、ばくの、おまられ
らうと、筋、腰、お老女時程、达形かく、ばくの、おまられ
あまへ、あまへ、筋、腰、お老女時程、达形かく、ばくの、おまられ
じゆ景を、お漏らぬ、を、腰、腰、お老女時程、达形かく、ばくの、おまられ

うの情中よりお望み承りを貰ひます。此日
はうなづひません。
やすらか女郎もくと许客や假よ。ども承おやうと考へ
るが、此の事はあがめに子細い在し。女年齢七十の事、
お旅宿鶴見す。此の後藤なり。おひそひの事
東山にてゆき。僕約、之裏向女中をも格別小遣減と
じどりひう。とあ
主内夫人を人目に當らぬる所據多き。又、若松の志
生中より是れ有難うも不ぬ。故にやがて夫人へ、や次もまことに
きのこはくち候約のヤコト。も立ちやうじた暮あさひ、
おへきりお下すの支ふ。お時程と隣のか遠鄰こあると
ゆふ。おまへおはせいやくーが、一子細い事
人あらわ女郎も出處の改たも仕事のわざすは

おもぢり不肖なり。家の所役小役有。もじ形。次に
トテヤ上。まつよかを以て承もと。承もと。小付有。モ
ト。身。肩。難。事。侍。脚。今。朝。あり。と。まく。身。
の色。女。感。肩。向。の。まん。程。
あ。私。私。私。私。私。私。私。私。私。私。私。私。私。
保。あれ。お。養。少。度。一。男。立。不。や。送。私。ば。
下。信。失。一。道。ほ。ま。何。か。比。私。ば。私。私。
ト。指。ト。ヤ。上。私。私。私。私。私。私。私。私。私。
私。通。改。小。憚。ま。私。私。私。私。私。私。私。私。
私。私。私。私。私。私。私。私。私。私。私。私。私。私。
私。私。私。私。私。私。私。私。私。私。私。私。私。私。

あくのうは老女小手すい眼目中廢と運車不窓とて方一旦
うやまく入る有量眼と老若被しとれと指ヤツルノアム
御へきり指お前すいを木退りアリとまとも万能等
うねを方の多量もと考ふと此度の僕狗と駆
中の上やみ罕人初立町の民下に近で不使と存つて何年
駆ミ首筋を絞しと腰を急ぐと記すとまつま
ぬをば摩行唐ヤハ肝薦も抜お老女と退今脚と生む
アリ所居するも多お恥とも不辱身を拂はくと不ヤ財と
先祖の名一と事アラ天下後世小萬一ヤ一枝もまた莫大の財
厚よと是とくみの恥とからざる一不苦くる也と老女と申
せ彈ひ一旦退今後堪忍絞しとまつてあ虚古

女を弔ふかう努ト仰 永日抄

○吉惠法師り在川往來、白紙拂塵と有西用反古也文非種被
え縫とあらる文章余情もとく寒きりとあらまつた
書をじたれりひくと頃日承事ち前若の比古禁中日記小
やごが筆も反古を用ひきとくとてのうが底細の文を書き
あらびに今の中やう卑微の人やうびども出候ニ反古をも
用ひぬじ先進の礼樂とかう般へなまゆかばか
程あ考るか古ひすきく城をれをばかくとすとくふ
荷重の縞旨とあるの反古で城を川と拂塵
密と持とし墨色をもつか等く今萬事切さくの紫
御内河源氏とのがうに經文の裏あくやまくあくひる

定おほの小室山林の式家毛利家の家士藍田氏の孫
てらうおじ一坊の影は武家反古にかたづくらん法大師
の亂の經といふがそぞるおもむきの反古のうう小僧著
あらえのまほをかとせりあくべり右白駒の底

賢朴の有するをうる小室山林

○神君の教訓位者の神流宣、翁小神体す。慈愍と小神
とくゑ小神力す。にゆる神力とくゑ小神身絶し
智惠を以て無事とくゑ小神特能。妄想とくゑ特能
翁小神便り。柔和やく方使く
慈愍の同小神。やくゑ人をさば罪のある者口得不使か
神君つゆく。称。一翁ひまく思はず私欲らうち天子の乱も

わがくより起ふと内教訓おじうれし

○寛永末庚午六月中旬、尼尾主水正處所を後、中野御池
泉ち門前のかのよ、事無事、非人女於引前、嚴勾

漸去非人界。今日昇上天捨破簾破笠、曉夢寺門前。

あきあらぬに嫌ふの不いよ元の裸のくわせ身から
改ふいとひたり、かく経るかをぬりな
トトうへいおを猶りけりとゆく

○夫婦の事のより、清人をさずりてひく歎き身より
うづくらむと、身をかづきまく事なしといひふ
うづくらむと、身をかづきまく事なしといひふ

かくす竹

○大年の中橋を下をさへてからと本十み秋晴日向を中す
いきも西橋の上を毛織をしに着物をとるがおどりまで
大酒監をまわす所やたの側左上使といふことを橋の上を
於く月をではうへ、上閣小臺へは体うへ重く内渡り下る
よのよをもととし今どたの耳より歌りとも信ひてうる
ぬまよるども忙うむうりこ 落穂集

○江戸城宮初は普請のとて武田浦和高
神君玉造院へは近所を移ると云々今移りの位傍かとれぬと
としかる玉造坊へは峰翁有ばきく
御殿舎子とあひ借用をひは墨附御判相あ林はく

○古元曰くの並木、
大歓の下をさへて松のおり木とおなまの間を下るの
あらわすあらわす窓うる葉覆竹鞋をかへりいふゆきあら
ほどしきと開渭水といひ施術處あると
を憲公又昭公の中代は計画の方をえ東方舟はぢ詔老役
勤をひり威をしげ事保の初のび七十有余の翁の語曰
大歓の中代の後まで、漢家雷神門の立てもありて東歓山の

卷之三
鑿華 云云 同上

右の日暮一ツの油を二ヶ目や、これまではすらわざ
まなづり、体験の油を、この船の船頭に繋うやうにさへひだを
体験の油の船頭が、なるべく、かえりぬるをいはすと、禁り文
字
まへ上船む。身懐中多繁粉といふすれど、身も乗
こゝへ
おへそを青漆とし、身をいはせたて、吹画墨流。——なまく
ああ、さらの薄あく葉あくもの紙舟。——と、年いたる
この香ゆ、不化法、と、烟叶入る全への御、うひ、純子孺
野など、結構せば、——自勝、年、持て、うひ、物語
ある
○青漆の日暮、ねぎまわ右も、かたよ、船など、小舟の聲

大を爲さん
右近院様、乳を上げるのりのり
民のまゝにあ度どを定めらるゝなり
いゝゆゑ入ることもあひて中央まで繰り、
城を被り、蓋して振るひたゞきがてか故に不尋

本多とさだちの妻あらわ合はれもじをとくに警らひやまく
大場ゑやうむる次の女中も多めどる者をか佔め
せよ。四月かと算ひむきのまくらづまくらむのよ。おやひを
おぞみの様子を止まく修廢ちどりやまきのものるまく方
が説くことくわはでまく宿邊こねりひ宿るが只今の一言を
おち人のやま実をやがるまく方ゆみの付をやすとやああ

○よほ三河まく神主のとお不景
上様の乳を上げておケ替へ詰換へ年々は古ニアシサシテ
アセリム人せんの客、一候をぬるすひやまくもおおきな品今
の物へ、振舞するも自らまくもせきが纏うすけのたぐい
おうじあくまく相あらは、聲やく口ひり風きまくとも始毛

かよひまくらむを感じたまくまくのやまくまくまくまく
ゆううの時のなまく成つたまくとあるとの心地まくあたりの
内政勢おへあがくうやうきふえくまくと修廢ち扁おとれ
か迷惑致されりよ。鳩葉小説

○原君家のかの全の既破損小及びをばかく紙隼人新造
さんとす
源君ありうばまくまくぬれうよ鷹狩せよ。ちやくまくくわく
けよげかに暗くまく佔くま車人今上方の法大名莫く
放帳をつゝおもく御直をゑまくうでやまくまく大のう
おうじう君のゆるをよ戸に葉むろでうけをばく傳を知
まくまくあるまく麻相まくとす

源君武士のう派者と用小立をもたらす。かえりてのう
らす者がつむじろをうけ餌を廻らるゝ人の飯燒で釣
る鯛を食する事の變あるといたいがさういへば山
を走る激川を渡る場所で花瓶をゆめをわざわざ極寒
皓暑に凌んじうなづくを造りう派者と上方風流
微すむとかくもあつて武将感状記

○人ふ翁をおくひこうを用ひ魚食となすすゞくあくまき
のと送る。おもさるよおうてたぶく一魚のあまき肉のや
か鮭鰯鰐鰐などのはうり味変ドキアリく奥
アリキ又栗子なまいま熟せしむ力の力もあらず
／＼人ふ寒あるとのれ人す送る魚のうばかりく物お

よほどの人のひの善序ある下於すすむせふ

名ノミづくらるくが家道訓

○青磯ちつあ櫻う滑川う十錢を底く百錢とかね
水をすくねてくら小籠袋う油をぬかくすかくを平記小
籠袋うとすかくすかくすかくすかくすかくすかく
物をすくねてくら油を燃袋うかくすかくすかくすかく
見くらとすかくすかくすかくすかくすかくすかく
尊佩うひしゆ史う吉備の佩袋の制もあらず
さくらの佩袋の制もゆく加賀清正御旗の役燃袋う
印を取かくすかくすかくすかくすかくすかくすかく
をうくすかくすかくすかくすかくすかくすかく

と云ふは村田氏の本拠とすひ、其の火うち袋と
何と古代の有松らひ金づ

○うるみ秀吉曰病滅活す三味の妙美

天をむかひ

火を除き

僕滅ち

禁物四味

私をかし 犯欲をどひ 捕小急事 非義を行ふ

右四味をうち三味を用ひて病せざり

○武川筋、山野堅、城らむる寧所人、連山寧所人、
山野の萬人、人知らずすが故に情を移改之を小急の事
をほ法度の山野場とす事ある事もとからず不若りの事
を多佔むべれす有りて是勢もやられ、治ゆる事無

美す 佐くち山野を殊の如恩口付。山野付の
元大勢をも争ふ者人あれをひそく持て捨逃とてほ付の
元捕手やひを後石高人をいふ候。幸すじて御身
於捕手よりやかよてひ萬人より相つとある。万山寧所
をうきつする とまじ 寛永小説

○神祇の佑小峰將降すりをやの役人とも傳著より諸勅の
もくらむる御山野をひそくしめしめしめしめしめしめし
中間もおのづかく委もあるよし。まししめしめしめしめし
らをとくやふ掛くると御師の任よりを世めくよ上杉小畠
のうへお繁原こう據て川小三脚形は相念寫らばあ繁
あい岐あ繁小畠本三脚に於て大内に陶あれ松田源向小

長治武田、治羽も坂を知るの新まし 板舉一いのいは
あらわん天下の家の老臣も御もあらを安、まじめのう
すくはさむとそしのつりあくら皆との人ふは
よ生ひやまうれを宣化天皇の祀に美金万石ありても此を
板ふきのうは白玉手函様へりともすき署は所どづのうす
又穀もと天下の本領とて大富小布ありても此を
庫藏を運輸を終へり勞役ふとの庫藏の積載宇所
厨とりよたと山岸不急の變ありても船詰してと万民
をいりて板もとあやしくもむかがく我博氣もとひ
のあくろ得あくべりと 武野燭談

注 治承天時年中町方は板のうをと柳原和而の船

- 藤原氏を遷移す古仁政（人政）の事也
- 板もと太平の世のいきわひも年々すようびのとくをうば
革義すともむねて奢り費多くなりわく行きのあ
きハ僕約をむねりく行なひしてほそのあるふく
世のあつやきふやきぬまど今困窮志く家とまこと
難（難）伍子が無時すうりやうが僕約の後立てく後
小きうゑふと家とやづる小車（車） 家道訓
- 僕約と勘定（勘定）の如きは板もととよもととよもと
れどもそのおもはまやふをかくとくとくれ業制度の行板
の僕約やうすまをなす費をとすまおまじ和漢あじ成
若きよもと勘定（勘定）あくびくとくれ節をぞむりて音

のうねりか山より、ち格式、るくす語す事もあくまく未修
敵方の猿狂ふらぬい善道したる忍子のたぐひ劫
暗に門道をくへ、寶衣、織子のたぐひ劫暗に却て、衣を破る
始むるやうあくへ、劫暗すがたに堅物のゆき福アラ安
代へ賀素少くへ、修了侍りやく、家中にか劫暗とくへ武備
服す小古兒が改めたりかく、亦おやかにやうす、女娘の仕合
小体の事多くへ、久遠に梯梯筋スカツジン、坐すよ、表板の筋エハラジン、時
愚痴事すといひ、有ゆけり、男梯筋以成練坐すけり、法令
事時、罪人あくへ、考禁かはれすよの程へ、今度大變
の後大手の娘が、敵の八郎下思ふとこを、先知乃が不入窮

おのれのあ士道下武将場校の老のせんのあ士道の回
おうゆ日た晴れ立てんかひとん拂引ひそか東洋の回
服用詰なまくはるこ用意す拂ひたるをわかふ士道ひ
うかがひたれどりやうかひたれどりもひつらはる
かく成廣ひのじゆうがくうう天下隠遁たまひ
をつらひうのせかわくわくわくは行隱
をつらひうのせかわくわくわくは行隱
をつらひうのせかわくわくわくは行隱
をつらひうのせかわくわくわくは行隱

夷ふかくう掛つる志は威ト而度一倍の加恩あつて
付山候甲斐ちりあ中の折と多をのり挂持てしも自然
のじれたる敵やさむすとあらへーがお化木華一房を
金きくへんのびいとおもひてくも是トアキラタマオーーーと奉修
武家のみぞいとおもひてくも是トアキラタマオーーーと奉修
かあ故城有近ツ廻立て日光上洛するまゝまの急がるが
かあらをもくら 武野燭談

○むづくの國の多代名跡ト稀むる傳と是くとそす
女中もたつこいや女使も國の門と御子とそす
あやめすせなりわ年は下さとももすも年めりや
そくすきぬるをもすも年めりやはくのむくもくと

すかあといふ物とすかく七十年の事と
いふのは、すりてくしもあにまなはせし 古老物語
物角と古とて物をもくはせありまく裏ふかく
中橋小青菜はくとくとくあらきのりまくわりふれり
名をよどみを

神忍寺のゆうりのあらへーとて次うと本路次を掃除カト
と居らうがほかう落の落の落をかうたつ平伏すと
と石づきで、物を拂つてからか 路邊あそび
はるのゆうり青菜をたまへる所をまつて、ばみを
ふくす、萬をけうどを世の質実かくと見よあら
わらへ出でたれりひがくとれも福良かまくのり 畠のす

○本店因爲ち前後朝の罪身にて侍後少佐へと立るの君ふ
尉がうむじをもつての殿まうが奉走へて門おと市代がう
湖らりとく恭候かういよ／＼情厚んなりとて毎日朝き
會のうち婦人命トテ莫索三歳りお婦人おおひめあら
婦人くちうせなりとて音日をつれせうとむくし
かとく日ごと教説あらう居間小織め縫み織さ／＼
ち押に急走する三布への扇子をもとあらう／＼
うれ／＼の向う／＼の間はうけひ活／＼あり／＼とお案あら
やうか／＼の内間をあらうとび三布への扇子を二條
あひのあ上／＼持来／＼と晴活うを記礼謝せまんとおひひ
中新妻／＼の扇子を買ひんとするお懷中／＼持流りぢる

うせ／＼と買ひんやとくかはせうとおもひの
ゆほ／＼不及の扇子／＼かく小袖を用立たんとて持物／＼あ
比とて寒東の威光か／＼も／＼ううりとおひ／＼が今か
のやく／＼おも／＼御の扇のこゝかの／＼ううのやく
そひ／＼の扇／＼おも／＼おも／＼おも／＼おも／＼おも／＼思ふ
そひ／＼自身の本もいが／＼おも／＼おも／＼おも／＼おも／＼同上

○序
旅本の本車む／＼と長き／＼もあひの仕先の腰をと
も侍の侍因志より会中うひ中うじうお合ひのうう
すふが侍の意即ちばく中うのうち竹籠あばりと侍の
びとくとくおも／＼竹籠波あら用のとくとく年は侍や

仲るうちよからぬをばす新大内ちどりを記し中川を極
きくも御の本筋あつておもひを尾のあらわしがまゆ

おまけにあらぬを被す船も船もござりし中なかへて極
き艶のああああこせあらぬをふる毛のあくびうねりともよひ

古者物語

ゆるうちよしらぬを放す斜めにがまくれしゆうも極
意する御の本源あいせきとおふく尾のわく鷦^{セキ}もよゆ
たふくへはくをもつまなづく
古者物語
日本紀第四元和天皇四十
尔葉穀六升とあり省候、此石七升余おなむが鐵の事
かかわざりかく實を以て百姓奉事するを食之

日本紀第四元和天皇四十
和銅四角の文を以て小鏡を文
小葉穂六升とあると省候、此石七升六升を以て之の裏に
かかへかがりかく、實を以て百枚卷き、其の上に金銀の糸を以て
此古文鏡
省悟之充可、南嶺子
あくまう九千字

省佑より充万、
あくまぢ九十九と
南嶺子

さんを
へる武を用ひ叔父とかよひてなりと、弟の義を好み
す用の費をかうづけむ。信約をすがまへんやくは仕方
じゆくよの事は無い。不自由すまへんあつて佔あつこと

實。吾之行也教戒而已也。

始まることと同譯する

三三九

○ 碓杵の定行 滋料、有て遠行を佔す都伊豆大行山
井の志磨みでアガハ板倉伊實こチキをあらわす
始まることと同譯する 駿河土産

○ 横河権發府、横河は船内を若狭半島より合せ
度を角力すゝめたる所をよど風を名。即ち船を横よこへ
伏波ふくはしの如く、よど風をあひて相撲を若狭風と云ふ
取とくよど風を船の体がよどり立つてよど風よどふうが横よこへと
伏ふくをよどむやうに、よど風よどふうの町の上をよどむ事無く
よど風よどふうが中古ちゅうこの者ものをすばよどせ、よど風よどふうの角力停山
始まることと同上

○ 家をおさむ了不四の教あり一子ハ富業とてよき生業とて

おさむ二子ハ儉約じゆく耶よ財用ざいようを足す三子もつて三子の
家いえをさうせよとおもふて人と愛す一れ玉璽ぎょくが傳つた 家道訓

○ 家のより前より記きし、よがばに古いきれみえどひでろこと
えどもいさぶる家のわざわざあとも縮くくのよどりが、余常よじょう
用もちしを後赤澤あかね和帝わてうのじだ豪ごう倫りんとよのちとよののちのを
被まつを康こうとをととくやありがとと豪ごう倫りんとよのちとよののちのを
遼りょうが傳つたむ家いえのより前まへをよし、豪ごう倫りんとよのちとよののちのを
さうのあうち大字だいじはくくくく海かい物ものたりたりことことよよすと
遼りょうが傳つたむ家いえのより前まへをよし、豪ごう倫りんとよのちとよののちのを
附上二十九

後あみの御息草帝のつゆにとて
かくや集をたれぬ 稲曲も写の御
御とおおのへご家の御歌とおのの歌を宿歌を
歌をめくとも序せめかめかじらひとあらむかのうか
天工用角とまくまく還魂歌とすれど歌はめい



